九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「全くの息子」 Utterson : R. L.. Stevenson の Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde が訴える ”mercy”

鵜飼, 信光
九州大学大学院人文科学研究院文学部門

https://doi.org/10.15017/19837

出版情報：文學研究. 108, pp.1-12, 2011-03-01. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

「全くの息子」Utterson
― R. L. Stevenson の *Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde* が訴える “mercy” ―

鵜　飼　信　光

I

R. L. Stevenson の *Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde*（1886）のジキルには大学時代からの親友、弁護士のアタスン（Utterson）と医師のラニョン（Lanyon）がいた。ジキルはハイドに変身するための薬の効力を確かめた後、自分の身に何か起きた時にハイドとして財産を相続できるようにした遺言を作製しようとする。その依頼を受けたアタスンは、遺言の内容の突飛さに強い反感を抱き、渋々遺言を受け取って保管していた。作品は、アタスンが彼の従弟エンフィールド（Enfield）からハイドの残忍な行為の話を聞き、ジキルの身を案じてハイドの人物を探り始める経緯の描写から始まる。アタスンを視点人物とした全知の語り手によるその叙述はジキルの死まで続き、その後に、公園でハイドに変身してしまったジキルに手紙で助けを求められて応じ、彼の変身を目撃したラニョンの手記と、自己の不道徳な部分を分離したいという欲求から薬を開発し、やがて薬なしでハイドに変身するようになってしまい、元に戻れなくなったことを述べるジキルの手記が続く。

作品の中盤までを占めるアタスンを視点人物とした部分は、作品が発表された当時は、ジキルの身に何が起こっていたのかについての謎への関心を読者の心にかき立て、ラニョンとジキルの手記の与える驚きを高めるために効果があったと考えられる。今日ではジキルのハイドへの変身という真相を知らずにこの作品を読む読者は少ないと思われるが、それを知った上でも、ア

タスンが視点人物である部分は十分に読み応えがあり、その部分がなければこの作品は興趣に乏しいものになっていただろう。

しかし、アタスンは小説の効果を高めるための視点人物にとどまらない重要な存在であると考えられる。作品中の彼の存在の意味の考察で意義深いと思われるものに、Peter K. Garrett の “Cries and Voices: Reading Jekyll and Hyde” がある。[1] ギャレットはその論考の中で、アタスンがハイドを目撃した後、ハイド的なものに伝染して（ギャレットはそのことを “contamination” という語で表現する）、ハイドに似通った者になっていることに着目している。ギャレットの論考の主眼は、ジキルが自己の善なる部分と悪の部分を二分しようとしているのに反して、作品がそのような二極化を否定し、かつまた二極を単純に一極化することをも否定していることの指摘にあり、アタスンがハイドに似通うに至ることは正義と悪という二極的と思われるものの混淆の重要な例と位置づけられる。ギャレットは、アタスンが残存するジキル的なものが呼びかけていたとも考えられる扉の向こうの人物の声をハイドの声と決めつけ扉を壊して侵入した場面に着目しながら、複数のものである「叫びや声」（ギャレットの論考のメイン・タイトル）を単一の声と見なす際に生じる暴力がその物語の要であるとする。[2]

本稿の考察は、アタスンがハイドと似通った者になることへの注目に関しては、ギャレットの解釈と共通するが、ここでは、ギャレットが「汚染」と見ているものにより複雑な面があり、ハイドを見た者自身が、ハイドの悪の様相であると考えたものに染まる傾向があることに注目する。また、アタスンのハイド化の要が「慈悲心」（“mercy”）の喪失であること、アタスンの名が「全くの息子」（“utter-son”）と読めることと彼がジキルの財産の相続者となることの意味にも考察を加える。そして、ジキルについての手記をアタスンに託したラニョンの名 “Lanyon” が寛大さを表す形容詞 “lenient” と似通うことにも触れながら、本作品における「慈悲心」の問題を考察して行きたい。

Ⅱ

ハイドの目撃者のハイド化は少女を平然と踏みつけたハイドの蛮行をエンフィールドが目撃した場面に見ることができる。その場面での目撃者のハイド化は二つの面があり、一つはギャレットが言う「汚染」として単純に考えることができるものである。

深夜、人のいない通りを歩いていたエンフィールドは少女とハイドが十字路でぶつかり、倒れた少女の腹をハイドが平然と踏んで通り過ぎ、少女が泣き叫ぶのを目撃する。彼はハイドに駆け寄って衿をつかみ、騒ぎを聞きつけて出てきた少女の家族らのいる場所まで連れて行く。少女は家族に外科医を呼びにやられて夜中に外を走っていたのだが、その外科医もやってきて少女の容体を見るが、怪我をしたと言うよりはおびえただけで、それで一件落着となってもおかしくない状況となる。しかし、エンフィールドも、少女の家族も、ハイドを一目見ただけで嫌悪感を抱き、「強いエディンバラ訛りがあり、バクパイプと同じ位に感情に乏しそうな」外科医もまた「他の者たちと同じよう」で、彼がハイドを見る度に「彼を殺したいという欲望のために吐き気を催し蒼白になる」[3] のをエンフィールドは目撃する。しかし、殺すことは問題外だったので、次善の策として、このことを醜聞にして、ロンドン中に悪名をとどろかせてやるとエンフィールドたちはハイドを脅し、結局、ハイドに少女の家族に100ポンドというかなりの金を払わせるに至る。

こうして彼らが脅す間の次の描写はハイドを目撃する者のハイド化の印象深い例と言えるだろう。エンフィールドのアタスンへの説明の中の一節である。

> 私たちがそれを激しく言いつのっていた間中ずっと、私たちは女たちをできるだけ遠ざけておいていた。というのも、彼女たちはハルピュイア［顔と身体が女で鳥と翼と爪を持った強欲な怪物］のように荒々しかったのだ。私はそのように憎しみに満ちた顔が取り囲んでいるのを見たこ

とがなかった。(9-10)

これらの人々の殺意は、ずっと後の手記の中でジキルが「命の危険を感じた瞬間もあった」(53) とこの場面を回想しているほどに激しさを感じさせるものだった。こうした殺意は、ハイド自身が後に道を聞いた老紳士を狂乱状態になって殺すことを考えても、非常にハイド的なものと言えるだろう。ギャレットが言うように、ハイドを見る者はハイド的なものに汚染されるのである。

しかし、ハイドの目撃者のハイド化には今一つ別の面がある。それは、ハイドの目撃者がハイドはこういう人物だと考えるまさにそういう人物の特徴をその目撃者が帯びるに至るという面である。目撃者が考えるハイドの人格の特徴はハイドの実態とは一致しておらず、目撃者が思い描くハイド像に目撃者自身がなってしまうのである。

この面は、エンフィールドたちがハイドを脅迫して金を払わせることと、エンフィールドがハイドを脅迫者と捉えていることとに見られる。100ポンドを支払うことになったハイドは通りに面した扉だけのある家に入って小切手を持って出てきて、エンフィールドたちは小切手が本物とは信じられなくて銀行が始まる時刻を待って一緒に行くのだが、小切手は本物と判明する。小切手の名義がエンフィールドも知る名士だったので、彼はハイドがその名士の弱みを握って脅迫して金を得ているのだと考え、ハイドが入っていった家を「脅迫の家」(10) と呼んでいるとアタスンに語る。しかし、エンフィールドはハイドに100ポンドを少女の親に支払わせたことについて全く罪の意識を抱いていないが、彼らがハイドに対してしたことは脅迫に他ならない。エンフィールドはハイドが行っていると考える脅迫を知らず知らずのうちに自ら行っているのである。

ハイドのなす悪事の詳細は不明瞭にされているが、彼が脅迫を行っていたとは考えがたく、もちろんジキルを脅迫していたわけではない。その点で、エンフィールドが脅迫者に堕すことは単純な意味でのハイド化ではなく、自

分が描くハイド像に自分自身が同化しているという意味でのハイド化である。ただし、出来事の順序としては、エンフィールドはハイドが脅迫を行う人物であると考えた上で脅迫を行ったのではなく、自分が脅迫をした後でハイドを脅迫者に違いないと想像している。しかし、順序はそのように逆であるものの、自ら悪事を行いながら罪の意識がなく、その同じ悪事をハイドが行う罪深い悪事として考えているエンフィールドの有様にはやはり、自らが思い描くハイド像への自身の同化が見られるべきだろう。

次節ではこうした、自らが思い描くハイド像へ自身が同化する、という観点からアタスンについて考察したい。

Ⅲ

日曜の散歩でエンフィールドからハイドの忌まわしいエピソードを聞いたアタスンは、ジキルの作製した遺言を取り出して眺め、自分の死後や三ヶ月以上の失踪の後にはハイドに全財産を譲るという条項が狂気じみているだけでなく、恥辱であることを恐れ始める。彼はその日の晩のうちにラニョンを訪れるがハイドについて情報は得られない。エンフィールドの話に想像力を刺激された彼は、ハイドが少女を踏みつける場面や、ハイドがジキルをベッドから起こして用事をさせる場面を想像しながら眠れずに過ごす。そうした想像の中でハイドは顔を持たず、アタスンは「本物のハイド氏の顔の造作を見たいという奇妙なほど強い、ほとんど法外な好奇心」(15) を抱く。

ハイドの顔を見たいというアタスンの好奇心については、二つの注目される点がある。一つは、Robert Mighall が Penguin 版の注釈で指摘するように、[4] もしもハイドの顔がジキルと似ていれば、ハイドがジキルの隠し子であるという推測ができ、ジキルの謎めいた遺言の条項に一つの説明をつけられるから、アタスンはハイドの顔を見たがっているのだという点である。アタスンが思い描くハイド像の一つは、ジキルの息子であることと言えるのである。ハイドの顔を実際に見た後には、アタスンはジキルとハイドの間の血縁関係を想像することはないが、少なくとも当初、アタスンはハイドがジキルの息

子である可能性への思いに強く捕らえられていた。後に述べるようにアタスンをジキルの「全くの息子」と考える視点に立つ時、アタスンは彼がハイドについて思い描いた人物像に彼自身がなっていることになる。

アタスンのハイドの顔への好奇心で今一つ注目されるのは、その好奇心が述べられる部分にある「そして少なくとも、慈悲心のない男の顔、消え去らない憎悪の精神をエンフィールドのような感銘を受けにくい精神にも、ただ現れるだけで引き起こすに足るような顔は、見るに値するだろう」(15) という一文の中の「慈悲心のない男の顔」という一節である。「慈悲心」の原文は “bowels of mercy” であるが、この表現は Katherine Linehan が注釈するように (15)、新約聖書「コロサイ人への書」第三章十二節に由来して、内臓を同情心の身体における中心として見なす古い考えに基づいている。それ故 “bowels of mercy” は “mercy” と同等に「慈悲心」と捉えられる。ずっと後に、アタスンはハイドがいる部屋の扉に迫った時ハイドが「お願いだから慈悲心を持ってくれ！」(“for God’s sake, have mercy!”(38)) と叫ぶのを無視して扉を破壊して中へ入る。アタスンはここで “mercy” を持たないかのように行動した形になっている。そして、“mercy” を持たないことは、「慈悲心のない男の顔」という言葉にあるように、アタスンがハイドの人物像として想像したことに他ならない。アタスンはこの点でも、ハイドについて彼が思い描いた人物像に自分自身が化しているのである。

ハイドの顔を見たいという思いに取り憑かれた後、アタスンは根気強く見張りを続け、エンフィールドがハイドを見かけた場所でついにハイドに会い、その顔に異様に強い嫌悪感をかき立てられる。彼はハイドが入った家の反対側に回りジキルを訪ねようとするがジキルは留守で、帰路、ジキルとハイドの関係を思い、ジキルを助けるために力を尽くさねばと決意する。ジキルの家から帰るアタスンの思いにも、ここでの議論に関連して二つの注目すべき点がある。

アタスンはジキルが若い頃の無分別な行いのせいでハイドに弱みを握られ支配されているのだと推測し、ジキルの立場を気の毒がる。しかし彼は、人

相の悪いハイドがジキルの過ちよりはるかに重大な罪を過去に犯しているに違いないと考え希望を抱く。つまり、ここでアタスンは、ハイドの弱みを見つけハイドを脅迫することでジキルをハイドの脅迫から救おうと考えるのである。同一人物であるのでハイドはジキルを脅迫しているのではないが、アタスンはハイドを脅迫者であると思い描く。そしてアタスンは自らがハイドに対する脅迫者になることを目指す。エンフィールドがそうであったようにアタスンもまたハイドを脅迫することを悪だとは認識しない。知らず知らずのうちに、アタスンも彼が想像するハイドの人物像に自ら陥ろうとするのである。

ジキルの家から帰るアタスンの思いの中でさらに重要と考えられるのは、ハイドがジキルの遺言の存在を知った場合の危険を彼が心配することである。ハイドが過去に重大な罪を犯しているに違いないという希望を抱いた後のアタスンの思考は次のように描かれる。

> 「・・・物事がこのような状態で続くことはあり得ない。ハリー［ヘンリー・ジキルのヘンリーの愛称］のベッドの横へこそ泥のようにこの男が忍び寄る様子を思うと寒気がする。哀れなハリー、何という目覚めだろう！それにその危険さはどうだろう。もしこのハイドがその遺言の存在に感づいたら、彼は相続が待ちきれなくなるかもしれない。そうだとも、私は一肌脱がなければならない ── もしジキルが私にそうさせてくれさえするなら」と彼は付け加えた「もしジキルが私にそうさせてくれさえするなら。」というのも、彼は今一度、彼の心の目の前に、すかし絵のようにはっきりと、遺言の奇妙な条項を見たからである。(19)

ハイドとジキルは同一人物であるので、ハイドがジキルの遺産を相続するのを待ちきれなくなるということはなく、それはアタスンがハイドについて思い描く人物像である。アタスンはこの二週間後ジキルと会い、ハイドから解放されるために力になろうと申し出るがジキルは心配は無用だと断り、逆に

ハイドに遺産を譲る条項を必ず果たすようアタスンに約束させる。そのためアタスンがハイドの過去の罪を探り始めることはないが、ハイドは些細なきっかけで犯した殺人を目撃され、アタスンはジキルからハイドとは完全に縁を切ったと告げられたりする。アタスンはジキルが謎の隠遁生活を始めた時にも親身に心配し、ジキルの家の召使いたちがジキルの部屋にハイドがいるという疑いを抱いて援助を求めてきた時にはそれに応じてハイドの声の聞こえた部屋の扉を破って入りジキルを捜す。しかしジキルが発見されるはずはなく、少し前にジキルがアタスンから取り戻していた遺言状が、遺産の受取人をハイドからアタスンに変更された状態で発見される。

アタスンは、ハイドが遺産を狙ってジキルに危害を加えることを心配してジキルの力になろうと決意し、ジキルの身を案じ続けるのだが、最終的にはジキルを死に追いやり、しかもジキルの遺産を受け取ることになる。ジキルを殺して遺産を手に入れる、というアタスンがハイドが行いかねない行為として想定したものを、アタスン自身が行うに至っているのである。ジキルが遺産の受取人をアタスンに変更したことについては、ジキルは独身で子供がいないので、親身に心配してくれたアタスンを受取人にしたことなどが考えられるが、ジキルは手記にそのことには一言も触れていない。

アタスンが遺産の受取人になることについて作品中ではそのように説明が全くないが、その唐突な設定は、アタスンがハイドについて思い描く人物像に彼自身がなって行くことを描く重要な要素だと考えられる。アタスンはハイドがジキルの息子である可能性をかつて思ったが、彼はまさにジキルの息子のようにジキルの遺産を譲り受けることになる。彼はハイドを慈悲心のない男として思い描いたが、彼自身もジキル＝ハイドの慈悲心の求めを無視して扉を破り、ジキルを無慈悲に死へ追いやる。あくまでもアタスンが思い描いたハイド像との同一化ではあるが、アタスンはジキル＝ハイドの血を引いて類似した人物のようにハイドと同一化し、言わば彼の「全くの息子」として莫大な財産を手にするのである。

Ⅳ

“utter”には形容詞として「完全な、全くの」という意味があり、本稿ではそちらの方の意味を採用して、“Utterson”を“utter son”「全くの息子」を意味するものとしてここまで議論を進めてきたが、アタスンの名については既に、「言葉を発する」という意味での“utter”に注目したAndrew Jeffordの考察がある。[5] ジェフォードは作品中に、ワインが醸し出す会話、暖かく明るい室内、夕べの炉辺の人の集まりなどの肯定的なイメージ群と、ジキルの薬と関連する会話・発話の困難、霧が出て寒々とした人気のない街路や深夜などの否定的なイメージ群とがあり、アタスンの名の“utter”は和やかな会話と、秘密や恐怖による会話・発話の困難との作品中の対比と関わるものだと考える。ジェフォードが言及しているように、Vladimir Nabokovも作品中のワインのイメージの好ましい印象とジキルの薬の冷え冷えとした印象の対比を指摘しており、[6] 会話・発話の困難さの表現が繰り返し現れていることも考えると、ジェフォードの考察には説得力がある。また“Utterson”の名で注意が向くのが「言葉を発する」という意味での“utter”であることは、パンチに掲載されたこの作品のパロディーでアタスンを茶化した人物が“Stutterson”(“stutter”は「吃音とともにしゃべる」の意味)という名になっていることからも知られる。[7]

本稿の議論はジェフォードの考察を否定するのではなく、この作品の人名にこめられた寓意の新たな解釈を付け加えようとするものである。ここではさらに、アタスンを「全くの息子」と考えることと組になる今一つの人名の解釈として、Lanyonを「寛大な」という意味の形容詞“lenient”と関連させる見方を提示したい。“lenient”はフランス語のように語末の“t”を発音しなければLanyonの発音と似通い、ラニョンのジキル＝ハイドへの態度も、アタスンの結果的には無慈悲だった態度と対極的であったりするのである。

ラニョンのジキルへの態度で注目されるのは、彼がハイドがジキルへ変身するのを目撃したこと記した手記を、あくまでジキルの死または失踪の後に

開封するよう条件を付してアタスンに残している点である。ラニョンはジキルからそれまでの経緯の告白も聞いているので、ジキルがハイドとしてダンヴァース卿を殺害したことも知っている。従ってラニョンはジキルを殺人犯として告発することもできたのだが彼はそれはせず、その告発となりうる手記もジキルが死んでから開封するよう条件を付けて、ジキルの処罰につながらないようにするのである。

ただし、ラニョンはハイドのジキルへの変身を目撃する前、ハイドから医師が患者の秘密を守ることを誓う「ヒポクラテスの誓い」を覚えているな、と確認され、「これから起きることはその誓いの封印の下に置かれるのだ」(46) と言われる。ラニョンがジキルを告発しないのはこのことのせいであり、また、ジキルが「私はラニョンの非難を夢うつつのように聞いていた」(59) と手記で回想しているように、ラニョンはジキルの告白を聞いて寛大な態度を示したわけでもない。あるいは、ジキルが手記の封筒に添えた紙に書いているように、ラニョンはアタスンに手記をゆだねると「警告」(41) もしていた。しかし、ラニョンがジキルを告発しなかったのが直接的には「ヒポクラテスの誓い」が理由であり、ジキルへの彼の態度も非難に満ちたものであった一方で、ジキルと密接に関わったアタスンとラニョンの二人の両者のうち、アタスンがジキルを死に追いやり、ラニョンはそうはしなかったという対照的な態度の違いは厳然と存在する。そしてその態度の対照的な違いは、無慈悲さと慈悲心の違いとなっているのである。

ラニョンとアタスンには、人格に表裏がないかあるかという対照も描かれている。アタスンがハイドの情報を得るためにラニョンを訪問した場面には、ラニョンの愛想の良さが「目にはいくらか芝居がかって見えるが、純粋な感情に基づいていた」(13) という描写がある。研究者によってよく指摘されるように、この作品ではエンフィールドや殺人の犠牲者ダンヴァース卿など、立派そうでいながら、夜中に何の用事でか出歩いていていかがわしさを感じさせる人物が多いが、「純粋さ」を言われるのはラニョンだけである。一方、アタスンは、快楽への好みを謹厳さで抑圧するジキルとの類似が最も詳しく

描かれている人物である。そうした二重性のあるアタスンが無慈悲にジキルを追い詰め、「純粋さ」を言われるラニョンが、ジキルとは科学上の見解の相違から犬猿と仲だったにもかかわらず、「慈悲心」を体現するかのようにジキルを追い詰めない、という設定は意味のあることと思われる。

*

快楽への好みを謹厳さで抑圧するという点でのアタスンのジキルとの類似は、アタスンが上等なワインが好きでありながら、一人で飲む時はその好みを押し殺してジンを飲んだり、芝居好きでありながら二十年間劇場に足を踏み入れていなかったりしているという作品の冒頭のアタスンについての描写(7) に見ることができる。また、ジキルが若い時の過ちでハイドに脅迫されているのだと想像する時には、アタスンは自分の過去を顧みて、「自分がなした多くの小さな悪事のために塵芥に等しいほどに卑下する気持ちになり、彼がしそうになって踏みとどまった多くのことのために厳粛で恐れに満ちた感謝の気持ちへと高められた」(19) とあるように、ジキル同様、自己の中の謹厳ならざる部分を感じる時がある。ジキルほど極端にではないにしろ、アタスンもまた自己の中の快楽への志向を通常よりも強く抑圧してきた人物である。

アタスンはまた、「彼は他者に対する定評ある寛大さを持っていた」(7) と描写されてもいる。しかし、そのように自他共に認める寛大さを持つアタスンは、結果的にジキルを無慈悲に追い詰め死に追いやる者となる。アタスンのこの姿を通して、作品は自己の中の快楽への志向を不自然に抑圧することが、他者への無慈悲な態度と表裏一体であることを警告していると考えられるだろう。あるいは、偽善的に自らの中に悪を隠している者が、ハイドの姿に自らの悪を投影しながらその悪を自己の中で増幅させてしまうことを作品は描いてもいるだろう。

他者への寛大さについて、作者スティーヴンスンは “Reflections and Remarks on Human Life” と題するエッセーの中で「他者のために言い訳し、

自分のためには全くしないことがこの人生での務めである」[8] と述べている。他者への寛大さがスティーヴンスンにとって重要な関心の対象であったことがそこにうかがわれるが、自他共に認める寛大さを持つアタスンすら無慈悲な迫害者となることを描きながら、『ジキル博士とハイド氏の奇妙な事件』は他者への慈悲心の困難さと、困難であるが故の一層のそれの重要性とを訴えている。そしてそれは、自己の中の快楽への志向を偽善的に抑圧することのへの警告と通底する訴えなのである。

注

1. Peter K. Garrett, “Cries and Voices: Reading Jekyll and Hyde.” *Dr. Jekyll and Mr. Hyde after One Hundred Years.* Ed. William Veeder & Gordon Hirsh. Chicago: U of Chicago P, 1988. 59-72.
2. *ibid.* 64.
3. Robert Louis Stevenson, *Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde.* 1886. Ed. Katherine Linehan. New York: Norton, 2003. 9. 以下、本作品からの引用はこの版の原文のページ数を括弧内に示すことにする。
4. Robert Louis Stevenson, *The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde and Other Tales of Terror.* Ed. Robert Mighall. London: Penguin, 2002. 163.
5. Andrew Jefford, “Dr. Jekyll and Professor Nabokov: Reading a Reading.” Ed. Andrew Noble. *Robert Louis Stevenson*. London: Vision Press, 1983. 51-55.
6. Vladimir Nabokov, *Lectures on Literature*. Ed. Fredson Bowers. New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1980. Rpt. in *Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde*, Ed. Katherine Linehan, 185.
7. Paul Maixner, ed. *Robert Louis Stevenson: The Critical Heritage.* London: Routledge, 1981. 208-10.
8. Robert Louis Stevenson, “Reflections and Remarks on Human Life.” *Lay Morals and Other Ethical Papers. The Works of Robert Louis Stevenson Tusitala Edition.* Vol. XXVI. London: William Heinemann, 1924. 76.